

VI 神の契約と祝福の道

創世記 17:1~2、22:15~18

はじめに

アブラハム契約を振り返ると、そのすばらしさは神がアブラハムを一方的に選び無条件契約を結ばれたということに尽きる。ところが、上記のように百歳を目前にしたアブラハムに主は、「あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。」と命じられたのである。「全き歩みをせよ」との召しは、四百年の時を経てエジプトから贖いだされたイスラエルの民に、シナイの荒野でモーセを通して再び語られる。これが、冒頭のみことばである。今回は、無条件契約と律法を従順に守ることとの関係を見ることがテーマである。

1. 無条件契約でも、祝福を受けるためには主に従う必要がある。

(1) 契約を結ぶ神の名は「全能」

時は流れた。アブラハムの妻サラの女奴隷ハガルによってイシュマエルという男の子が生まれた。この時アブラハムは 86 歳になっていた。そして 13 年の歳月が過ぎ、アブラハムは 99 歳、サラは 89 歳になっていた。そこに、主ヤハウェの介入があった。主自ら名乗る名は「エル・シャダイ」すなわち「全能の神」である。「ヤハウェ」は、契約を結び、それを守るという性質を強調する場合に用いられ、「エル・シャダイ」は不可能を可能にするという側面を強調するときの名前である。

(2) 全き者であり、全き歩みとは

① 冒頭の創世記 17 章 1~2 節にある、「全き者」とは「完全な者」を示しており、しばしば道徳的に罪のないことであると考えられる。道徳的に完全な人は存在しない。使徒パウロですら真実な告白をしているのである。(ピリピ 3:12)

また、「完全」という言葉は、聖書においていろいろな意味で使われている。例えば、Ⅱテモテ 3:16~17 においては、「良い働きにふさわしく、十分に整えられた」状態を指している。

② さらに、主イエスが山上の説教で「ですから、あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい」(マタイ 5:48) と述べておられる意味について解説したい。この言葉の前にある数節のコンテクストは、私たち主を信じ、神を「天の父」と呼べる神の子たちへの語りかけであることを語っている。「完全であれ」との戒めを守ることによって「天の御国に入る」(同 5:20) のではなく、感謝すべきことに、神はすでに「天にいます私たちの父」(同 6:9) となってくださったのである。

③ それでは、全能の神がアブラハムに求めた「全き者であれ」とは何を意味するのか。それは、以上の考察から推し量って、「私たちの存在を全面的に明け渡すこと」を示している。聖歌 511 番の歌詞がその心をうたっている。「真実全き心もて/いのちの君に仕え/イエスを高き則として/雄々しく戦わばや/いざ上げよ主の旗を/いざ叫べ主の道を/いざ仕えんとかしえりわれらの主なるイエスに」。この全心を込めての献身は、神によって義人ヨブのうちに現われ、またそれゆえに神はダビデを愛されたのであった。ここで、アサ王に対する主の心を見わおう。(Ⅱ歴代誌 16:9)

(3) アブラハム契約はその子孫との契約でもあった

① 話を創世記 17 章に戻そう。その 3 節から 6 節を見る。

ここには、三度繰り返して「国民の父」という言葉が語られる。同じ 7～8 節も見よう。

「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、またあなたの後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。わたしは、あなたの寄留の地、カナンの全土を、あなたとあなたの後の子孫に永遠の所有として与える。わたしは彼らの神となる。」この約束の地の成就については後に論じることとする。

②「永遠」という約束の成就是、永遠の王、十字架で死に、よみがえって永遠に生きて、栄光の父の御座の右におられるイエス・キリストの再臨を待たねばならない。

(4) 契約のしるし、「割礼の儀式」

① 主なる神はアブラハム契約の「しるし」として割礼を受けることを要求された。

(創世記 17:9～10) 割礼とは、男性器の包皮を石や、金属のナイフで外科的に切り取ることである。神は語られた。「あなたがたは自分の包皮の肉を切り捨てなさい。それが、わたしとあなたがたとの間の契約のしるしとなる」(同 11 節)。

アブラハムははっきりと認識していたと思われる。これは血の契約である。与えられた契約は、パピルスや羊皮紙に書いて残されるのではない。肉体の上にその記憶が書き記されるのだ。

② 割礼の儀式は、アブラハムの子孫の間で厳しく守られた。神はこの箇所でも厳しく命じておられたからである。モーセは、エジプトの王ファラオの前に出かける前に、彼の子どもに割礼を受け、神の裁きによる死を免れたほどである。その時、モーセの妻ツィボラはモーセに代わって息子に割礼を授けたのである。彼女はモーセのことを「血の花婿」と言ったのである。(出エジプト 4:24～26)。また、イスラエルの民はヨルダン川を渡り終え、神の約束されたカナンの地に入った時にこの儀式に身をゆだねた。(ヨシュア 5:2～9 参)。

③ 新約聖書は、神の御子イエスについて「八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子の名はイエスとつけられた。胎内に宿る前に御使いがつけた名である」(ルカ 2:21。使徒パウロも「私は生まれて八日目に割礼を受け、-----律法についてはパリサイ人」(ピリピ 3:5)と自ら証している。

主イエスの福音により、使徒パウロは割礼の儀式律法からの解放を与えられた。初代教会では、割礼問題について激しい争論が巻き起こり、パリサイ派の人たちは異邦人が救われる条件に割礼を受けることを条件としたほどに、脱線した。それはエルサレム会議において記録されている。(使徒 15:23～24)。ここでは、ガラテヤ人への手紙で区切りとする。(5:2、6)。

2. アブラハムの従順

(1) アブラハムは主の命令を従順に守った。

①以上、割礼についての長短を述べてきたが、割礼の霊的な意味を述べなければ、読者に誤解を与える恐れがある。使徒パウロは、割礼の儀式の外面的な弊害を述べながら、一方では割礼の精神と意義を語っている。それは、霊的な割礼があるという告知である。

「キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨てて、キリストの割礼を受けたのです」(コロサイ 2:11)。また、ピリピ 3:3 でも語る。

割礼の精神は次の三つである。

★聖別-----「それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らから離れよ。――」全能の主は言われる」(Ⅱコリント 6:17～18)。

★純潔-----「キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨てて、キリストの割礼を受けたのです」(コロサイ 2:11)。(マタイ 5:8 参)

★従順-----「アブラハムとその子イシュマエルは、その日のうちに割礼を受けた。彼の家の男たちはみな、家で生まれた奴隷も、異国人から金で買い取った者も、彼と一緒に割礼を受けた」(創世記 17:26～27)。

② アブラハムの従順の最大の証しはイサクの奉獻であることは、だれしも同意するところである。それはまた、アブラハムの生涯における最大の試練であった。(同 22:1～2)。

★試練は突如臨んだ。

彼の世継ぎ、百歳で生まれた子ども、神への愛そのものがテストされたのである。彼ほど神を愛し、神を第一にした人生を歩んだものが他にあるだろうか。それは、信仰のテストでもあった。アブラハムはどのように信じたのか。彼は、比喩的に言えば、イサクを死者の中から取り戻したのです」(ヘブル 11:19)。さらに言えば、従順のテストであった。(創世記 22:3)。神の命令を聞いた「翌朝早く」である。おそらく誰にも告げずに素早い行動をしたのである。★父と子の対話は行き詰まり沈黙を破って、息子イサクの質問で始まった。火と薪はあるが羊がいらないのはなぜかという問いである。父が息子を縛るとき、イサクはなぜ逃げなかったのか。これら一連の行動の中に、息子イサクの信仰の従順を見ずにはおれない。

「――『その子に手を下してはならない。その子に何もしてはならない。今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく分かった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった』」(同 22:10～12)。この時主の使いの声は、イサクも聞いたであろう。イサクは、身に割礼のしるしを帯びていることの祝福を実感し、ここに信仰の継承もなされた。

むすび

今回は、無条件契約と律法を従順に守ることとの関係を見ることをはじめに申しあげた。イサクの従順に、神の子イエスの従順への洞察が与えられるのである。イサクは死を免れたが、キリストは苦い杯を最後の一滴までも飲み干されたのである。父と子が山を下りる前に、主の使いはアブラハムに語りかけた。(同 15～18 節)

アブラハム契約は無条件契約であり、神のみが責務を負う片務契約である。しかし、アブラハムの従順、「全き歩み」によって祝福が確かなものとなった。

「**あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に聞き従ったからである**」(同 18 節)。